

# 南海のワクワク、シーラと古地図に見る 極東黄金島再考

的 場 節 子

はじめに

- I. アラビア人が伝えた極東黄金諸島とその日本比定説
  - II. アラビア人が描いたワクワク、シーラ
  - III. 南シナ海交易と南夷ワクワク、シーラ
  - IV. スペインから来たユダヤ人が見た東洋とシーラ
  - V. 海洋中のワク地名について
  - VI. カタラン・マップに追う極東黄金諸島情報の系譜
- 結 論

はじめに

日本の国名や国内事情がいつ頃から、またどのように西洋に知られていたか、という問題は、日本の対外交渉史研究の基礎的課題のひとつである。そこでは、コロンブスが率いるスペイン艦隊の航海が引合いに出され、日本（ジパング）の黄金情報が地理的発見の時代の幕開けの誘因となった、と説明される場合が多い。

ジパングと同様に、黄金島情報と結び付けられた日本の呼称として言及されたもののなかで、時代的に最も古い例としてアラビア人らが伝えたシーラやワクワクという名称がある。九世紀半ば以降、イスラム勢が既に日本の情報を西方に伝えていたとするこの考え方は、前世紀に西欧で唱えられた学説であり、明治・大正時代に日本にも紹介されている。

特にワクワク＝倭国説に関しては、桑原隲蔵氏による同説日本紹介<sup>1)</sup>と時期を同じくして、フランスでワクワク＝倭国説を批判するガブリエル・フェランの論文<sup>2)</sup>が発表されていたにもかかわらず、その紹介が同時進行しないという一方通行の形で日本史、東洋史の研究分野で取り上げられ、やがて通説化していった。今だにその影響が尾を引いている事實は、『國史大辞典』の例を初めとする日本の呼称論のみならず、地図史や中東関連の一般啓蒙書においてもワクワク＝倭国説が引かれるという事態に見てとれる。逆に、フェラン論文の発表以後半世紀が経過しているにもかかわらず、対外交渉史研究における日本の呼称論の中でフェラン論文があまり反映されていない現状は、同分野で黄金諸島問題にアプローチを図る際に直面する矛盾であり、その検討を前進させるためには、先ず現実に流布しているワクワク＝倭国説の是非を確認する、というステップを踏まえざるを得ない。

筆者は、試みに、広汎な海洋に散在するワク、或いはワクワクに類する地名を地図上に拾い、シーラという地名の分布との重なりを検討してみたところ、ワクワク、シーラ、黄金産出が重なる一帯の島々が実在することを確認した。さらに、古代以来の地理的史料や南海諸国関連史料などに基づいて検討を加えると、これらの地名自体が、古代の海洋移動と関連して伝播した文明の名残りであることもおぼろげながら見えてくる。こうした試行

錯誤を総合した結果、日本の呼称として取り上げられてきたワクワク、シーラの名称は、むしろ古代以来の東洋文化地誌の情報や地図の継承の中で取り組むべき課題と考えるに至った。またイスラム地図に見えるシーラ、ワクワクの位置と、中国、ポルトガル、スペインなどの地理的史料を比較することによって極東黄金諸島の位置を絞っていったところ、極東海域のアラブ系交易航路上の黄金諸島ワクワク、シーラの新たな位置比定を可能とする史料も得られた。

そこで本稿においては、アラビア人らが伝えた極東黄金諸島の名称をきっかけとして以上のような検討を重ねた結果を、数ある極東黄金諸島情報の再検討作業の第一歩として報告する次第である。

## I. アラビア人が伝えた極東黄金諸島とその日本比定説

ジパング=日本説を背景として、アラビア地理書にみえる黄金島ワクワクを倭国に比定する説は、19世紀末のド・フーイエ<sup>3)</sup>に始まる。日本に同説を紹介したのは大正年間の桑原隲蔵論文であり、アラビア地理書に見える黄金諸島シーラを新羅に当てワクワクが倭国を指すものという見解を、地名発音の類似性と中国東方のシーラ及びその背後のワクワクという、史料の位置描写を根拠に論じたものであった<sup>4)</sup>。先にも述べたように日本ではこのド・フーイエ=桑原説が現在も引用されており、9世紀以降アラビア人達の間では日本の産金が有名で、倭国(ワクワク)の名も知られていたとする説明が繰り返される例は枚挙に遑がない<sup>5)</sup>。

またそれとは別に、黄金島シーラを日本とする説を支持したのはマルコ・ポーロ研究者のヘンリー・ユール<sup>6)</sup>であった。日本では明治30年に、イドリーシー文献史料に基づいたE. ルノードによるシーラ=日本説(1718年)の存在を中川清次郎が示唆した例に始まり<sup>7)</sup>、

大正4、5年に発表の内田銀蔵論文によってシーラ=日本説、朝鮮説が整理された<sup>8)</sup>。そしてその後シーラは新羅であるとの説が世界的に優勢となり、シーラ=日本説は消えている。

さて、ド・フーイエ説の矛盾を指摘したガブリエル・フェランの論文「ワクワクは日本であるか?」(1932年発表)<sup>9)</sup>を見てみると、ワクワクはワクとも認められて東西に分布し、そのうち極東にあるものに関しては地誌的条件が日本と全く符合せず、むしろ当時のアラビア人がザーバグ zābag (シュリ・ヴィジャヤ王国)と呼んだスマトラである可能性を結論付けている。なお、フェランはシーラに関しては直接論じていないのだが、同論文中に〈Sīlā=Corée〉との注記が認められるので、シーラ=新羅説は支持しているとみえる。実際に、シーラとワクワクの位置関係(中国東方海上のシーラ、その向こうのワクワク)を朝鮮とスマトラに置き換えてみると無理が認められるのだが、今のところではシーラを新羅、ワクワクをスマトラとする説が一般に流布している状況にある<sup>10)</sup>。

なお、日本でこれらの説に異論を述べた一人に金銀貿易史、鉱山史研究者の小葉田淳氏があり、ワクワクを日本やスマトラと比定する事の不合理性を示唆されていた<sup>11)</sup>。この意見はド・フーイエ説、フェラン説に認められる矛盾点を指摘したようにもみえるが、小葉田氏は具体的な位置の比定をせず、これらの情報の現実性を疑問視した立場から踏み出していない。

ワクワク、シーラ関係のアラビア史料に関しては、関西大学東西学術研究所訳注シリーズとして『シナ・インド物語』、『インドの不思議』という、9世紀から11世紀にかけてのアラビア語文献が邦訳出版されており<sup>12)</sup>、前者はシーラ、後者はワクワクの情報の史料としてアラビア語専門外の者には貴重な文献となっている。筆者はその他にもイスラム百科事典”First Encyclopaedia of Islam”<sup>13)</sup>や、

フェラン論文の紹介史料、ヘンリー・ユールの『東西交渉史』<sup>14)</sup>に見えるアラビア史料などを参考資料として利用した。

ワクワクの名称の扱いの現状については、上述の邦訳『インドの不思議』に、「倭国説に対するスマトラ説があるが未だ不確定」という説明がある<sup>15)</sup>が、これまた上述のイスラム百科事典のワクワクの項（フェラン執筆）に基づいている。またシーラについても、『シナ・インド物語』に「シーラーとは新羅の音訳で朝鮮を指すと推定されていることは周知の事実」と記されている<sup>16)</sup>。両翻訳を手がけられた藤本勝次氏はワークワーク、シーラーという仮名表記を使用されているが、本稿では過去の数ある表記例の中から、便宜上ワクワク、シーラという表記を使用する。

## II. アラビア人が描いたワクワク、シーラ

イスラム地図で最も知られている地図は、12世紀のアル・イドリーシーと呼ばれる地理学者の手によるものである<sup>17)</sup>。彼はイスラム世界の人間ではあるが西欧世界との接触が多く、当時コルドバ・カリフ支配下のセウタ、コルドバ（現スペイン国）で成長し学を修め、更にイタリア半島南のシチリア島で地図製作活動を行った。本稿で見てゆくものの一つは、同島のパレルモにあったノルマン王ロジェル二世の為に1154年に作成した、70葉の区分世界地図（「ロジェルの書」所収）である。これは同時期製作の円形地図（T-O地図）とは全く異なり、プトレマイオス伝統下の平行緯線と経線を用いて投影法でまとめられていた。アジア地域の具体的情報を描いたものとして知られているこの地図の他に、同形式のものとして、73葉から成るイドリーシー小区分地図（アル・イドリーシー没後の1192年）がある。本稿ではイドリーシー地図研究で知られるコンラート・ミラー監修本から、この二種類のイドリーシー地図（以降便宜上1154年版をA図、1192年版をB図とす

る）を採用して<sup>18)</sup>、黄金諸島と伝えられた島々や地図の形状を見てゆく。両図に関して本稿中で使用するアルファベット表記はミラー監修本の表記に従う。

A・B両図ともに上が南、左が東であり、問題となるワクワク üāk üāk はA図では横帯I・縦帯X区分にいくつかの島名、その上方に大地の地名として、また横帯I・縦帯IX区分にも大地の地名としてワクワクと見える。同図のワクワク諸島の下（北）方にはシーラ島がいくつか描かれている。

一方のB図では、地図中の南シナ海に面する中国沿岸の形状が変化していると同時に同海の島々の位置にも変化が見える。この上方横帯区分外・縦帯X区分にはA図以来のワクワク2島が残される一方で、複数のシーラ島やマグー島が消えて、他の島に書き換えられている点に注目したい。

同図中の横縦の帯区分番号のうちでも、特に横帯区分はイドリーシー地図では重要な意味を持つ。南から北にIからVIIの番号が記された横帯は赤道からの距離を表すクリマ区分（クリマータ）と呼ばれ、赤道から北緯64度迄を必ずしも等分ではないが七分したものである<sup>19)</sup>。ワクワク、シーラはI区分帯、すなわち赤道に最も近い熱帯に描かれている。先の参考文献中のワクワク、シーラ産品を見てみると、アロエ、麝香、ゴム、良質の黒檀など熱帯産品であるので<sup>20)</sup>、この地図上の位置区分とは適合する。

アラビア地理学が継承していたプトレマイオス地理学では、インド洋を閉鎖された内海とした為に中国（シナイ）の海岸は地図中に南下する形で描かれていた。しかしアラビア地図学では既に十世紀半ばにアフリカ大陸と中国とを切り離した円形地図が作成されていて<sup>21)</sup>、極東海域に進出していた彼らの知識が地図上に反映されていたことが判る。そして極東でアラブ系交易が活発化して以降のイドリーシー地図になると、南部に関しては中国

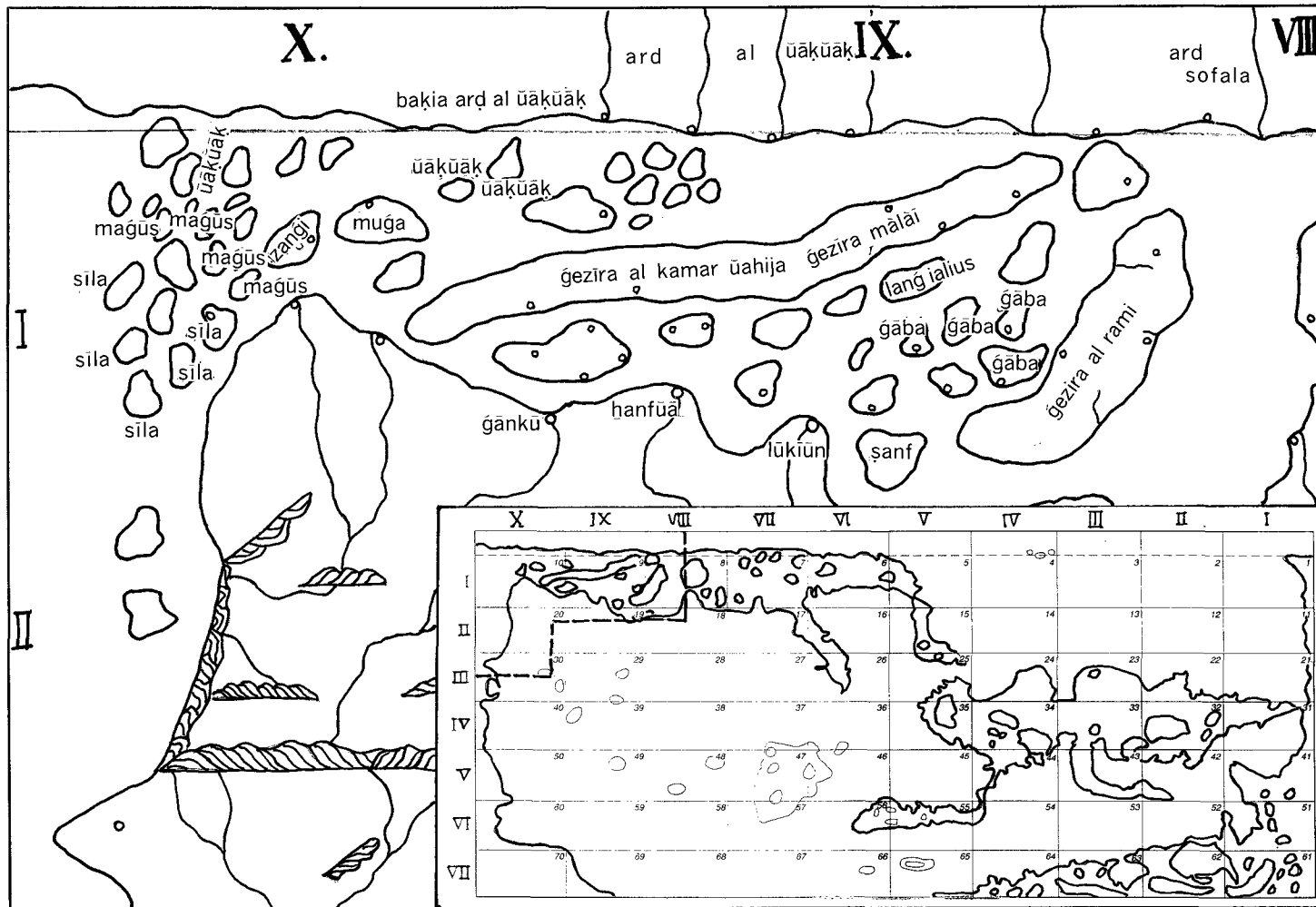


図1 1154年イドリーシー地図(A図)の南東端

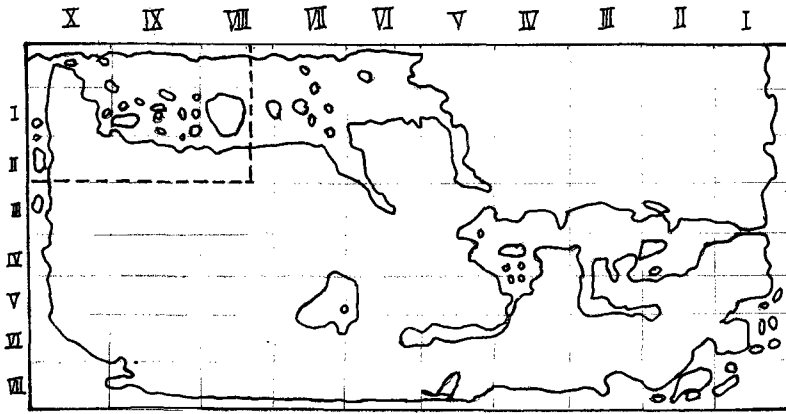
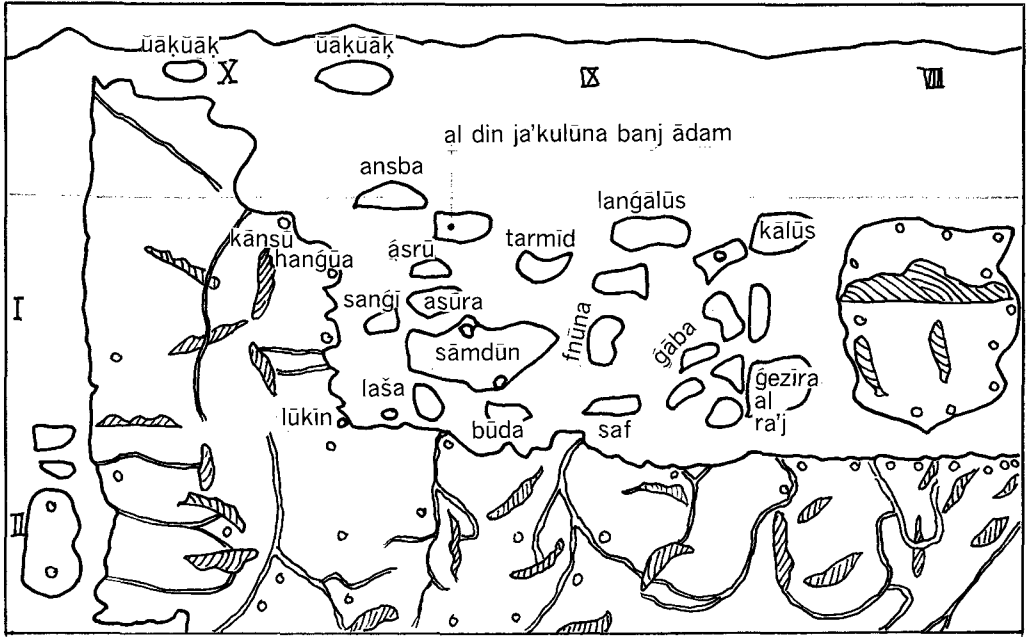


図2 1192年イドリーシー小地図 (B 図) の南東端

大陸東岸情報を詳しく伝えるようになる。また赤道南方ではアフリカ大陸を描き入れる為になんかなり圧縮されて変形しているとはいえ、A 図において「ūāk ūāk の大地」という記載が、上方横区分外・縦 VIII の sofala (現在も同名) の地に海岸沿いに続くアフリカ大陸の東岸南部に見えるが、アフリカのワクワク地名に関しては本稿での深入りを控えておく。

イドリーシー地図がこれ程の極東部の形状把握を可能とした背景には、なんらかの極東地図現物を入手したという事はなかったのだ

ろうか。地図の存在そのものに関しては、イドリーシーの時代までに、中国地図史では貞元17 (801) 年「賈耽華夷図」をはじめとする、外国情報を描いた華夷図がいくつか知られている。そして西方からの極東進出に関しては南海交易拠点であった広州で、東西の史料が伝える西暦879年の黄巢の乱の際に、多くのアラビア人、ユダヤ人、ペルシャ人等が殺されたり外国人が追放されていた<sup>22)</sup>。またその後泉州においては、五代 (907-960年) に既に「招来海中蠻夷商賈」と史料が伝え<sup>23)</sup>、宋代哲宗元祐年間 (1086-1093) には「提舉

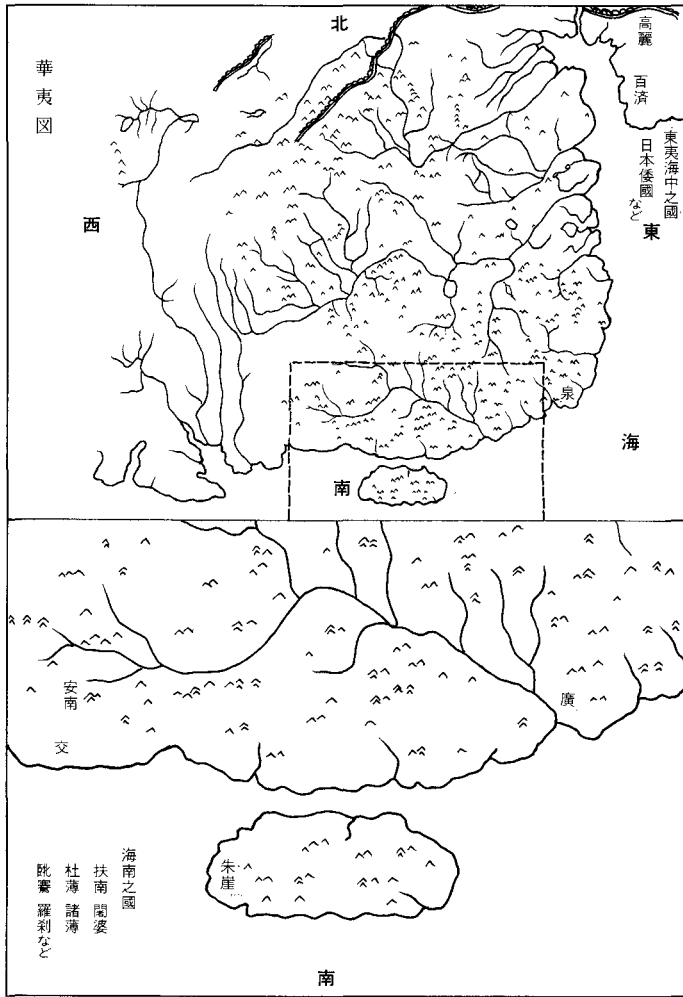


図3 1137年西安石刻華夷図

市舶司（中略）掌番貨船舶徵收貿易之事以來遠人通遠物」とある<sup>24</sup>。即ち、9世紀の段階で広州に大規模な外国人の居留が認められ、その後暫くの海禁期間があるものの、10世紀に入ると泉州の開港と共に外国商人が通い、その後は居住するに至っている。このようなアラビア人、ユダヤ人、ペルシャ人の交易活動を通じて、中国製地図が地中海地域にもたらされた事は充分考えられる。ジョゼフ・ニーダムはイドリーシーB図を1137年の禹蹟図と比較して中国作成地図の質の高さを強調したが<sup>25</sup>、ここでは同じく現存する最も重要

な中国地図の一つであり、外国情報を伝える華夷図を取り上げて比較検討する。それは北宋滅亡後投降した劉豫を皇帝に据えて金が暫定的に建てた漢人の国、齋の年号をその銘文に記した、阜昌7（1137）年「西安石刻華夷図」として知られるものである。

### Ⅲ. 南シナ海交易と南夷ワクワク、シーラ

その銘文に、唐代の賈耽の華夷図より外域諸国を省略したと記されている西安華夷図（図3）は、宗代以前の中国皇帝覇権範囲を示す目的で作成され<sup>26</sup>、禹蹟図と比べて海岸

線や河川はいささか単純化している。ここではまず東シナ海と、いわゆる南海である南シナ海（中国古名では漲海，アラビア名でシンの海）とを分離するかのごとく，大陸を四角に張り出させた特徴的な海岸線がイドリーシー地図と重なる点に注目したい。その上で，華夷図の泉（州）とA図の gānkū（横帯I・縦帯X），B図の kānsū（横帯I・縦帯X）を見比べ，同様に続いて廣（州）をA図 han-fūā（I・IX），B図 hangūā（I・X）と対照し，また華夷図の海岸沿いに左（西）へ移動した，安南の交（州）とA図の lūkūn（I・IX）及びB図の lūkīn（I・X）とを対照して見る。その結果，南シナ海を東シナ海と分離した南海として描き，上記の港を南海沿いに配置した共通の認識がイドリーシー地図と華夷図とに認められる。これが円形図からの変化に中国地図の影響を考える所以である。

この華夷図上で視覚的に日本が東夷である点が明白となる。また既に，桑原隲蔵論文でも引用されたく広州東方の海にあるワクワクやシーラの島々>という位置描写が，北緯30度以北の日本や朝鮮半島を指すものでない事を，イドリーシー地図に見えるワクワク，シーラの緯度区分（赤道に最も近い熱帯）との格差から確認した。

ここで更に加えて航海者の表現を借りるならば，16世紀初頭にアラブ系極東交易路を制覇したポルトガル史料に見える<sup>27)</sup>，「シンガポール海峡通過後，赤道から北上する海には，ジャパン（日本），レキオス（琉球・台湾），ルソン等の島々があるといわれる」とする公的記録がある。同史料は日本発見以前に中国人水先案内による伝聞情報に基づいて，南シナ海海域に対して北上航路の北方にある東シナ海の島名を北から並べて，最北部にある日本の位置を明記している。ところが，海洋航海仕様のポルトガル船と異なる沿岸航海方式のアラブ系船舶で同じ海域を行くと，シンガポールからトンキン湾を北上後インドシナ半

島東岸を経て，南海交易港泉州即ち大陸南シナ海沿岸東端で南側沿岸の東進が終わる。その向こうは中国東方の海である。

このような航海者の目とは逆方向から地理把握をした華夷図は，大陸中原部から見た東夷，南夷という分類で東シナ海諸国，南シナ海諸国を描き分けたものであった。これらの視座の差を踏まえて整理すると，アラブ系概念でいう中国東方の島々のワクワク，シーラとは，北回帰線の南に位置する聖地メッカを起点とした東方で熱帯に属し，それは中国の地理概念では東海中の東夷ではなく南海中の南夷と分類される。

では南夷ワクワクはアラブ系情報以前の中国史料ではどう扱われているのだろうか。1137年華夷図の南夷中の地名で浮上するのが，杜薄，薄刺，諸薄の，「薄」音 bō, bāo, bohk などである。同図の地名出典とされる『通典』には，杜薄国（杜薄洲）を扶南（カンボジア地方）東方の南海（漲海）中にある島としている<sup>28)</sup>。杜薄を社薄の誤記として本来は社薄であるとする松田壽男氏は，これをジャヴァカ Javaka の音訳としてスマトラに当てた<sup>29)</sup>。しかし同地に産するとある丁子（雞舌香）の産地は，この当時モルッカ諸島に限られたという山田憲太郎氏の専門的指摘を無視できない<sup>30)</sup>。従ってその描写，位置から考えてもこれをスマトラとするのは不自然である。また同じく『通典』火山国の条に見える諸薄国<sup>31)</sup>について，藤田豊八氏はアラビア人がザバグと呼んだジャワ島であるとしている<sup>32)</sup>。松田，藤田両氏が仮名表記したジャヴァカ，ザバグなどの名称は，7世紀以降興国となったシュリ・ヴィジャヤ（サンスクリット語で別にザ・ワカ za-vaka と呼ばれ，アラビア語発音では zāvaj, zābag などと表記されている）王国に対して使用された名称である。その時代差を考えれば，3世紀の『扶南土俗』<sup>33)</sup>などで既に見られた諸薄，社薄の名称を，7世紀に興国した国の名であるジャヴァカ，ザ

バグの漢字表記とは説明できない。

ここはひとつ諸蛮国などと同様の使い方で、「諸」の意味そのままに「複数の」薄の国と理解したらどうであろうか。中国文献史料には諸薄国という独立した条は見えず、逆に、『新元史』巻二百五十三列傳では南シナ海周辺の原住民を指す形容詞的に、「薄」を使用している事実がある<sup>34)</sup>。また「朕即位以来薄海内外親如一家」と始まる至元四年詔（『安南史略』巻二）の例や『新元史』巻二五〇日本伝「朕自臨御以来綏懷屬國薄海内外」のように蛮夷の海を薄海とした使用例が見える。賤しいという意味での「薄」の使用例が『漢書』にも認められる点も併せてみると<sup>35)</sup>、ジャワやバリに使われる「婆」とは区別して、「薄」が語音と語意とを合わせて使用されていた事が判る。従って、『通典』に南洋種族を指した使用例がいくつか認められるボクという発音の「濮」とともに<sup>36)</sup>、これらボク発音の漢字は南洋の原住民を指す意味を含んで当てられたと推定する。

また、上述の藤田論文は諸薄の西にある加營国をインド南西端のキロンとしたが、いくつか疑問と思われる節もある。そこで本稿では藤田説の論拠の疑問点を次の様に洗い直してみた。まず、「扶南伝」とされる「扶南東界即大漲海海中有大洲洲上有諸薄国」<sup>37)</sup>の位置記述は、現在のカンボジア東方の南シナ海にある島に諸薄国があると伝えている。次に「又有加營国北諸薄国西山周三百里」<sup>38)</sup>を見ると、この加營 (ka-yim) 国は崖州 (海南島) に相当するのではないだろうか。とすると、まず『漢書』巻二十八地理志第八下で「自合浦徐聞南入海得大州東西南北方千里」と知られた珠厓郡には「亡馬與虎民有五畜」とあり、漢代に環南シナ海交易圏の中国窓口であった海南島に馬の需要があったと見える。次に『吳時外國伝』に「加營国王好馬月氏賈人常以舶載馬到加營国」<sup>39)</sup>とある通り、三世紀前半以前に外国人 (月氏) が馬を同地に輸入

したとの解釈も可能となる。加營国を崖州と考えると、『通典』火山国の条では加營国 (海南島) 東方にあるとされる諸薄国 (筆者解釈では「複数の薄の国」) が、フィリピン諸島からボルネオ島に相当し、その一帯に極めて多く認められる bag, bak という音の地名、日常用語の存在と結びつく。既に藤田論文の諸薄=ジャワ島説を否定しているので、加營国を崖州とするこの考え方に矛盾はない。『南州異物志』の「斯調海中洲名也在歌營東南可三千里」という斯調は、藤田説ではセイロン島とされているが、この歌營が加營国と同一の地を指すか否か不明である。古代ビルマの集落を指すカヤインという語の存在や、またシーランという地名も散在する点に留意して、『太平御覧』巻七八七、四夷部八の斯調国の検討は今の段階では保留しておく。

記述内容の上では、「扶南伝」としてこれらの国々特産とされる火浣布を、フィリピン特産のアバカ (バナナと同じく学術名 *musa* 種) に相当すると判断する。樹皮から繊維をとる技法の類似性や、燈火油をとったり燈心とする他にもバナナの葉同様にその葉を調理具として食物の蒸焼きに使うというこのアバカは、火山土壌を最も好む短期生育の植物である点からも一連の史料記述内容と矛盾しない<sup>40)</sup>。

#### IV スペインから来たユダヤ人が見た東洋とシーラ

黄巢の乱の死者にユダヤ人が少なからず含まれていた点からも明らかなように、ユダヤ人も極東交易では重要な存在であった。彼らの記録はマルコ・ポーロの東方見聞録程有名でないが、1271年に海路ザイトン (泉州) 迄到達したユダヤ人の旅行記<sup>41)</sup>、また以下で検討する12世紀のユダヤ人の極東旅行記がある。この旅行記はスペインのサラゴサ出身のユダヤ人ベンジャミン・デ・トゥデラによるもので、1162年故郷サラゴサ (アラゴン王国) を



出発して1172年にスペインのカスティリヤ王国に戻る迄の間の旅の記録である。

同時期に同じイベリア半島にありながら、地理学者アル・イドリーシーはコルドバ回教国出身、またデ・トゥデラはキリスト教国アラゴン王国出身であった。ただし、この時代のユダヤ人とアラビア人との間ではギリシャ科学等の学術知識を高める交流が親密であったらしい。デ・トゥデラは、旅行帰路ヨーロッパに入る際にイドリーシー地図作成の地理学院があったパレルモに立ち寄っている。この旅行記は15、6世紀の写本（ヘブライ語）がいくつか知られているが、本稿は英国博物館蔵（27089番）写本の英訳版を利用した<sup>42)</sup>。

このデ・トゥデラの旅行記は、中国自体の記述に乏しいものの、極東南海航路の貴重な情報源であるので、そのうちの要点のみ抜粋して、以下に邦訳して紹介する。なお、地名のアルファベット表記は英訳史料のまま、また文中の〈番号〉は英国博物館蔵写本の頁番号を示す。

「〈90〉クランKhulan（インド南西端の現キロン）迄（バハレーン近くから）7日間の航海、ここから以東は太陽崇拜の国である。

（略）〈91〉太陽崇拜の風習を持つ彼らは、市街周囲のあちこちの高台に毎朝馳せ参じて〈92〉朝日を拝み香を焚く。（略）〈94〉イブリグIbrig（英訳注記にはセイロンともされるが不明）からシン（泉州か広州であろう）迄の航海日数40日。シンは最東端にあり、そこにはニッパの海（Sea of Nikpa 英訳注記は寧波を示唆）があるという。ニッパの海はオリオン星の真下の暴風海域である。時々、舵手が制御出来ずに暴風でニッパの海へ流される船があるが、そうなるとお手上げで船乗りは手も足も出ずに、食料が底をつき体力が消耗して命果てるのを待つだけである。多くの船がこの様にして遭難したが、中には運良く難を逃れて生還する者もある。そのような船乗りは牛の皮を用意していて、〈95〉暴風

に巻き込まれてニッパの海に吹き流された時には牛皮に身を包む。これは防水にも役立ち、同時に短刀を装備して海に飛び込むのである。そうするとグリフィンという怪鳥が船乗りを動物と間違えて海から掴み挙げ、餌食としようと陸地の山や洞穴に運び落とす。船乗りはそこですかさず短刀を抜き出して怪鳥の息の根を止めるのである。そして牛皮を脱ぎ捨ててから人家のある集落を目指して歩いてゆく訳だが、この方法でいかに多くの船乗りが命拾いしたことか。（シンから）15日の航海で、千人程のイスラエル人が居住するアル・ジンガレー Al-Gingaleh に到る。」

同記事をアラビア地理書などと対照すると、10世紀から11世紀にかけて集められた『インドの不思議』の物語中にも、風にまかれてワクワクに漂着後サンフ（占城）へ向かった話や、漂着地で人食い大入道と出会った話などの『船乗りシンドバッド物語』の題材が見える<sup>43)</sup>。デ・トゥデラの時代も『船乗りシンドバッド物語』推定成立時期と重なるものであるが、中でもニッパの海の遭難談はまさにシンドバッドの七つの航海の嵐を思わせる。またシンドバッド第二の航海の、羊の肉を身につけてロック鳥に運ばれた話を初めとして繰り返し登場する怪鳥伝説は、ボルネオ島やミンダナオ島など南シナ海一帯中心に広く認められる<sup>44)</sup>。『諸蕃志』やマルコ・ポーロ情報もそのような怪鳥伝説を伝えているが、より具体的な1521年のマゼラン遠征隊員アントニオ・ピガフェッタの報告書を見てみよう<sup>45)</sup>。同報告は遠征隊員が直接聞いたとして、ブルネイ北方の大漲海（古代のSigno Magnoを指すと報告書に説明がある）の航海難所や、また同海で遭難した少年が水牛とともにガルーダに運ばれて生還した伝承などの、現地水先案内人の話を伝えた。共通する怪鳥伝説と、先の二書の記録の航路、航海時期、モンスーンの方向に基づいて考えると、必ず物語の初めに遭難するシンドバッドの冒険談は、往路

マレー半島以東の南西モンスーンによる遭難体験談であり、その性格は『インドの不思議』中の話と同様である。この南西モンスーンの風向きによって漂着する島々の位置は、南シナ海東方に吹き寄せられたと考えるのが道理であって<sup>46)</sup>、このような状況の遭難漂着を伝えた『船乗りシンドバッド物語』、『インドの不思議』中のワクワク地名も南シナ海東側でなくてはならない。ヘンリー・ユールなどはデ・トゥデラの話を馬鹿げた噂話として片づけているが、その記述には他の史料と一致する部分がある点を評価したい。

またデ・トゥデラの航路にあり、シンの地が面する赤道直下（オリオン星直下）のニッパの海とは、マラッカ海峡から南シナ海南部にかけて散在する名称ニッパに由来すると思われる。『後漢書』を初見として『扶南土俗』などに見える漲海（南シナ海）を航海の難所とする記録や、1521年のマゼラン遠征隊報告中の現地水先案内人が伝えたシナの海の高難と怪鳥伝説が、デ・トゥデラが伝聞して記録したニッパの海の情報と重なる点を見れば、ニッパの海を南シナ海とするのは問題ないであろう。中国人が南海情報を外国から収集していた一つの理由として、この漲海を恐れて自ら航海に乗り出す事をしなかった点かなりの比重を占める<sup>47)</sup>。

デ・トゥデラは中国からの帰路にアル・ジンガレー Al-Gingaleh という地に立ち寄った。これはシンハラ語等のシンハラ Sinhala に相当する語である。シンハラという言葉はセイロン島やシーラン島の語原であり、「輝く島」という意味とされる。先に見たデ・トゥデラの書には、インド南西端クランより東は太陽崇拜の風習の国々であるとあった。登る朝日を拝む為に高台に毎朝赴く、という風習が示す通り、日出る処、東方、或は光の概念はインド文化圏で重要な意味を持っていた<sup>48)</sup>。西欧人による類似の描写を挙げると、1639年作成の東インド報告というポルト

ガル史料<sup>49)</sup>も、セイロン島のシンハラ族が太陽を神格化していたと注目していた。紀元前1000年頃迄にインド・アリア人の中で成った『リグ・ヴェーダ』に見られる、全てのものに霊があるというアニミズムは、太陽をはじめとする具体的自然崇拜を人々の生活の中に組み込むものである。そして太陽を拝むという風習は、西欧世界には強烈な印象を与えたい。この文化が日出る東方へ向かって行ったことは、フィリピン考古史料に見えるインド文化圏の影響により立証される<sup>50)</sup>。それはかなり古い時代から環南シナ海交易圏を通じてフィリピンに波状的に到達した。言語が文化的影響の重要要素である事はいうまでもなく、現在でも多様なフィリピン原住民言語中には、東を意味するシラタン、シラカン、シランガンなどの語があり、同様に光を意味するシラック、ジラットなどの語がある。その他にも神官を意味するシランガン、シロンガンという名称やシーラ、シーランという地名も挙げられる<sup>51)</sup>。

ここで言語の継承派生を見ておくと、まず、母体であるインド・アリア語の段階で「輝く光」を意味していたシーラ *sīla*<sup>52)</sup> は、同じ意味でサンスクリット語の *śīla*<sup>53)</sup>、シンハラ語系パーリ語ではシーハ *sikhā* と継承されると同時に、シーラン、シランカと変化して徳の高い人を意味する派生語が生じている<sup>54)</sup>。またシーラは古代モン人の間でもシール *sil*、シーラ *silā* として、徳の高い人を指した事が知られている<sup>55)</sup>。タガログ、ピサヤ語などの原住民言語に336語を数えるというサンスクリット語の影響は<sup>56)</sup>、インドシナ半島北部横断経路或は海路、南シナ海東側に伝達されるに到ったものであろう。中でもシーラ（シンハラ、光、日出る東方）という語がフィリピンで定着したのは、その語意がインド文化圏で持つ重要性や、或は大陸から見た東方という位置などを考慮すれば至極当然である。1528年にセブ島に到着したスペインのサアベ

ドラ遠征隊員の報告が、太陽という名の近隣の島々との交易を記録しているが<sup>57)</sup>、これはセブ東隣のセイラン島（レイテ島）を指している。

ジンガレーに類似する地名は、ザンガルラ（ミンダナオ南方の島）<sup>58)</sup>、ジャワ島東部のシンガサリなどの古い地名の例がある<sup>59)</sup>。デ・トゥデラが立ち寄ったアル・ジンガレーの具体的位置は不明であるものの、広州から15日の航海であるのでシンガポール海峡の東側で当時栄えたジャワ島のシンガサリの可能性が高く、デ・トゥデラの帰路は南シナ海東側航路であったといえる。この航路は九世紀末期の黄巢の乱で広州を追われて以降に開発されたもので、台湾からフィリピン諸島、ボルネオ経由、ジャワ島、マレー半島を結ぶ。同航路のアラブ系交易の足跡は、九世紀以降の中国貿易陶磁器やベルシャ陶器破片などが、ルソン島マニラ付近、ミンダナオ島ブトゥアン、ボルネオのサラワクなどで発掘された結果証明された<sup>60)</sup>。中国史料でも、『太平寰宇記』巻百七十九勃泥国の条に「太平興國二年八月其國王向打遣施努副使蒲亜利判官哥心等来朝」とあり、また同条に「其使者云在上都之西南居海中去蛇婆四五十日去三佛齊四十日去摩逸三十日去占城與摩逸同帆之日皆以順風為計不則無限」とある。これは西暦977年にボルネオ国王の使節の副使として、アラビア人ともベルシャ人とも云われる蒲亜利が来朝した際の記事である。十世紀後半にはアラビア人やベルシャ人が利用していたフィリピン諸島、ボルネオなどを經由して広州からジャワ、スマトラを結ぶこの新航路は<sup>61)</sup>、明代万曆四五年（1617）完成の『東西洋考』巻九船師考に「東洋針路」と表記されている。古来の航路であった「西洋針路」との接点は、「即婆羅國此東洋最盡頭西洋所自起處也」とある文萊国で、ボルネオ島ブルネイであった。このような新規東洋航路の現地情報が、デ・トゥデラのパレルモ立ち寄りなどの形で地中海

に集積されたのであろう。

## V 海洋中のワク地名について

ワクワクはワクとも表記されることを念頭において、現代世界地図に残るワクに近い音の地名（wak,bak,bag,uak,fak,pak,etc.）を収集してみたところ、世界中で約400近い地名が見つかった。これらの地名を白地図上に記すと古代メソポタミア、アッシリアの地帯を中心として、西はトルコ、東ヨーロッパ、北はロシア、カザフスタンからシベリア方面など、南はアラビア半島、バントゥー語圏やエチオピア、スーダンなどのアフリカ大陸、東はイラン、アフガニスタン、パキスタン、インド、インドネシア、フィリピン、パプアニューギニア、オーストラリア東部、ニュージーランド、太平洋の諸島を経て中南米にまで拡散していた<sup>62)</sup>。すべてのワク地名が同一系統とは言えないがその分布状況は大凡で、大陸部ではインド・アーリアン言語系統とセム語系統の系譜と重なり、また海洋部分に関してはオーストロネシアの海上移動と重なる。

ここで南島ではワクという語が何を指して使われていたかを考えると、まず古タガログ語ではヴァカ（死者の霊、葬儀）、バグラン（神官）という祭儀関連で使われていた語がある。と同時にミンダナオ島の部族の間ではワクワクという鳥が告げる前兆で、生活の大事を決する卜占も行われている<sup>63)</sup>。タガログ語やビサヤ語でバクワ（ワクワ）と呼ばれる鳥（*Pitta sordida sordida*）や、フィリピンの諸言語でワクと呼ばれている鳥（*Corvus*）もあり<sup>64)</sup>、土地によってはこのワクを死者の靈魂を表す聖鳥と見ている。鳥関連から翼を指す語を見てゆくと、フィリピン諸島諸言語の中にはファファク、パヤク、パクパクなどがあり、北方の台湾高砂族言語でもバランガ、パクパク、プワクなどで翼を意味する。日本語でも鳥々、人々といった重複表現があるが、タガログ語でも複数を表すのに名詞の重複表

現が使われる<sup>65)</sup>。この傾向は高砂族やオーストロネシア言語全般にも通じるもので、翼一雙という表現であろう。

またボルネオでも鳥を霊媒と見る風習があることや、いわゆる鳥人といわれる鳥の羽飾りを付けた戦士の風俗があることが十五世紀前半のイタリア人旅行者の記録にある<sup>66)</sup>。羽飾りに関しては、『太平寰宇記』の琉球国(台湾)の条に「為傘飾以毛羽」とあり、更に時代を溯ると『山海経』に羽民国や謹頭国といった鳥人の描写がある<sup>67)</sup>。実際に人面鳥、鳥人の異人像は三星堆出土遺物にも認められるので<sup>68)</sup>、そのような文化風俗は中央アジアから東方海上に向けて、北は朝鮮から日本海へ、そして南はベトナムから南シナ海方面へ伝播したと考えられる<sup>69)</sup>。ベトナムやボルネオの古代の羽根飾り付き葬儀の文様と、フィリピンのパラワン島出土(推定1130B.C. - 840B.C.)の葬瓶にある死者の舟の装飾の共通性もこれを裏付ける。

このような東洋の鳥人風俗の他にも、遥かに太平洋を超えたイースター島にはアクアクと表現される精霊の伝承や、マケマケと呼ばれる神格と関連する鳥人風俗がある。これら二極の間の海洋中には、ハワイに天空の神を指すワケアという名称があり、或いはタヒチやマルケサス諸島などで見られる羽飾りの風俗があるなど、鳥との関わりが太平洋のワク地名分布を特徴付けている。そしてこれらの諸島を結ぶ手段である舟自体の名称は、ワカ、ワア、ブカ、ヴァカ、バランガイ<sup>70)</sup>であり、高砂族語ではバロコル、アバグ、アバグという様に<sup>71)</sup>、先に見てきた翼という名詞の単数形に通じるものがある。

以上の如く南シナ海東方の海洋中の島々には、別個に生じたとは言えない複数の共通性がワク地名と重なって存在しており、フィリピン諸島やモルーカのセーラン島が東端となっていたシーラ地名とは別の時代にワク地名伝播があった可能性が浮上してきた。先に見

たシーラは太陽崇拜と関連していたが<sup>72)</sup>、同じようにワク地名を検討してみると、インド・アーリアン語ではバカ baka として白鷺を意味すると同時に、これは地方によっては、bakka, baga, baya, bagu などと変化することもあって神格を意味する<sup>73)</sup>。サンスクリット語でも同じく白鷺であるが、この場合 baka を vaka とも表記して神の乗る鳥ガルダと結びつく<sup>74)</sup>。そしてパーリ語の場合、bako としてやはり白鷺を意味する<sup>75)</sup>。白い鳥、白鷺が浄土の象徴であり、鳥が神の乗り物であるという鳥の信仰もインドの宗教に認められた<sup>76)</sup>。越人の祖先が鳥語を操るなどという伝説もあるようだが<sup>77)</sup>、ベトナムには白鶴江という漢字表記(『安南志原』卷一山川)で Bach-hac という河がある。

ワク地名の拡散と同じ規模の伝播は古代のヤムイモやサトウキビ、バナナなどが知られていて、海洋上を西はマダガスカル、アフリカ、東はイースター島、南米方面へと伝播していった。そこで参考の為にこの経路の名称伝播の一例である、マレー人のヤムイモを指す標準名ウビ <ubi> という語を見てみよう<sup>78)</sup>。ウがオとなる変化の他に、<bi> について次のような変化が報告されている。vi (マダガスカル、ボルネオ、サラワク、フィジーなど)、wi (ボルネオ、ジャワ、スンダ、ニュージーランドなど)、be・bei・bai・ve・ke・ki・we (以上サラワク)、hi (セレベス、モルーカ諸島、タヒチ、マルケサス諸島など)、hu・huhu (以上セレベス)、fi (ティモール、ニューカレドニア、トンガ、タヒチなど)で、大半が同じ唇音で変化している。唇音の P と F との混用はフィリピン諸島言語の特徴であるが、イブン・バトゥータがアラビア語で Baghbūr と記した中国の皇帝(天子)が、マルコ・ポーロの東方見聞録ではペルシャ語系の Fucusur や Facfur と記されていた事実にも見えるように<sup>79)</sup>、唇音・破裂音の間では混用、変化が生じ易くなっている。ワク

地名に関する例としては、極東進出時のポルトガル人が、ペグー Pegú という地名が実は外国人の発音であり原住民はバゴウ Bagou という指摘していた<sup>80)</sup>。バコウ Bakou とはカンボジアでバラモン祭司を指す<sup>81)</sup>。

このように数あるワク地名の中でもシーラ地名との分布と重なる部分を絞りこむと、フィリピン諸島から南シナ海東側のボルネオ、セレベス、モルーカ諸島辺りまでに限られる。しかもそのうちで純度の高い金や露出するほどの潤沢な金が史料に認められるのは、ルソン島北端からミンドロ島、中心部のビサヤ諸島を経てミンダナオ島迄のフィリピン諸島全般であって<sup>82)</sup>、ボルネオ、セレベス産金は品質の点でやや落ちるとされていた。フィリピン諸島で特にワク音がバク、バグと発音されるのは、古代原住民文字の子音が (ba) (ca) (da) (ga) (nga) (ha) (la) (ma) (na) (pa, fa) (sa) (ta) (va—多くは ba で代用) (ya) の十四種類であって、しかもパーリ語同様に (wa) の表音文字を有しない為に (va) の代用に (ba) を用いたというのが理由である<sup>83)</sup>。故に baka, бага, vaka, として伝わった神格、鳥を意味するインド系の語の (ba) 発音がそのまま残った。現在フィリピン語辞典に見られる (wa) 音の使用は、後に同諸島を征服した西洋系外国人の耳に聞こえた音をアルファベット表記したものか、或いは外来語のいずれかであろう。

## VI カタラン・マップに追う極東黄金島情報の系譜

デ・トゥデラ同様、スペイン出身のユダヤ人で、当時の地図製作中心地マジョルカ島に在住していたアブラハム、ハフダのクレスケス親子は、1373年のアラゴン王子ドン・フアン の要請を受けて世界航海図を作成した。これは後にフランスのシャルル四世に贈られ、その後1389年にも同様の世界図が作られた。この1389年図は消失したとされ、現在はパリ

のものマドリード国立図書館の複製 (1375年版) が残されている。一般にカタラン・マップと呼ばれるこの世界図は、イドリーシー地図やユダヤ人旅行者情報に基づいたとも言われ、12葉の天文学、暦の部分と世界図より成る。ここではそのうちの極東部一葉の南半分を取り上げて、南海を中心に情報を整理してみた。

カタラン・マップ中の中国地名は必ずしも判然としていない。その理由として、中国東北端の地形も含めてゴグ・マゴグ情報がイドリーシー地図と類似している点に見えるように、そしてまた当時の極東交易路がアラビア人の掌中にあった事を考えても、同図はアラビア地理書やアラブ系交易に頼った伝聞情報をまとめるのが限度であった。南シナ海が洗う陸地の形状一つをとっても、東端を泉州迄とした大陸の描きかたは先に見た華夷図やイドリーシー地図と共通していて、混乱があるものの西方へ泉州市、泉州港、漳州、広東といった地名が見える。しかし海上に目を向けると、イドリーシー地図同様に泉州、廣州沖に多数の島々が描かれているとはいえ、ジャナ (ジャワの誤記か) 島より東の諸島群の名称はない。唯一、地図の東南端の大島にトラポバーナ (タプロバーナの誤記) と記されている。そして中国東南の南シナ海に相当する海には、次のような三箇所の説明が加えられていた。

いささか読みにくい極東諸島情報であるので、地図中の原文と筆者による邦訳を加えたものを次に記しておく。記述は①が泉州、廣州沖で大陸に最も近く、②はその南方の人魚絵の上、③はその東方で地図南東端の島について。

① “En la mar de les Índies són illes 7548, dels quals no podem respondre assí les maravellozes cozas qui són, en eles d'orr, d'er-gent e d'espècies e de pedres precioses.”<sup>84)</sup>

「インディアス (極東) の海には7548の島が

あり、金、銀、香料、宝石などの素晴らしい産物についてはここでは述べ尽くせない。」

② "Mar de les illes Índies hon són les espècies, en la qual mar navega gran navilli de diverses gens, e són açí atrobades -III- natures de peix qui s'apellen sarenes, la uuna qui és miga fembra e miga peix e l'altre miga fembra e miga auçell."

「極東の島々の海には香料がある。この海は様々な国の船が盛んに行き交う。ここには三種類<sup>85)</sup>の人魚と呼ばれる魚類がいる。第一は半魚半女性、第二は半鳥半女性である。」

③ "La illa Trapobana. Aquesta és appellade per los tartres Magno Caulii derrera de orient. En aquesta illa ha gens de gran diferència de les altres. En alguns munts de aquesta illa ha hòmens de gran forma, ço és de -XII- coldes axí com a gigants e mol negres e no usants de rahó, abans menjen los hòmens blancs e estranys si-ls poden aver. In aquesta illa ha cascun any -II- estius e -III- iverns e dues vergades l'ayn hi floren les arbres e les herbes, e és la derrera illa de les Índies, e habunda molt en or e en argent e en pedres preçioses."

「トラポバーナ島。この島は蒙古人によって大カウリイと呼ばれる東方最後の島である。この島の住民は他島と非常に異なり、山中には約12コド（1コドは約42cm、12コドは5m強）の漆黒で人語を解さない大入道がいて、白人や外国人をとって食う。この島では一年に夏が二回、冬が三回あり、草木は年に二度花を咲かす。極東最後のこの島は金、銀、宝石に非常に富む地である。」

以上三点の記述には、金、銀、宝石、香料の交易に集まる海上交通で賑わう南シナ海の様子が窺える。南シナ海東方のフィリピン諸島は現在7107島を数えるが、カタラン・マップ情報の島々は7548を数えているようである<sup>86)</sup>。そして同図作成と時を前後する十四世

紀末には、アラゴン人の手によってマルコ・ポーロの『東方見聞録』がカタラン訳されるなど、イスラム勢力と対決する為に蒙古勢力と交渉を望んだ経緯を踏まえる代々のアラゴン国王は、東方情報収集を怠ることはなかった。

## 結 論

本稿で見た西洋の地理的史料は、アル・イドリーシー、デ・トゥデラ、クレスケス親子という、いずれも現在のスペインを出身地とする者の手によるものである。東西交渉で栄えた地中海周辺都市の中でも、紀元二世紀の地理学者プトレマイオスやその以前の『エリュトラ海案内記』作者を輩出したアレクサンドリアは、東西交渉の要地であった。同地で集積された情報に基づいてプトレマイオスの手で作成された『宇宙誌』は、1406年以降にラテン語訳されている<sup>87)</sup>。

この極東情報はイドリーシー地図やカタラン・マップにはどのように継承されているのであろうか。原典119裏葉、120葉のアジア図と、66葉裏の記述にあるプトレマイオス極東情報は、中国大陸東南の海の島々を次のように描いていた。西から順に、Sabadice 三島（160度、南緯8度半）は食人種が住む、

Argentea Metropolis（167度、南緯8度半）銀の国、大量の金がある。そして赤道に近い Satysox 三島（171度、南緯2度半）付近では鉄釘使用の船が難破するとある。また陸地を見ると、Icthiophagi（180度区分、赤道から4度付近迄）は魚を食べる民の土地であり、地図の南東端の Cattigara が交易商品の地とある。

島々の食人情報、金銀情報、航海難所といった情報は部分的には既に見た『山海経』と『漢書』の他に、三国時代の『異物志』の「漲海海崎島頭水浅而多磁石」、『嶺外代答』巻六藤舟の項「大越大海商販皆用之或謂要過磁石山而然未之爾令蜀舟底以拓木為釘蓋其江多石

不可用鐵釘」などの史料に認められるものである。おそらくプトレマイオス図の Satysox 諸島付近は崎頭（珊瑚礁）と呼ばれた南海諸島の島嶼と砂洲の情報を描いていたのではないだろうか。またイドリーシー A 図では中国大陸東側の黄金諸島ワクワク、シーラの配置が、同 B 図になると、プトレマイオス図同様に南に延びた中国南海沿岸に囲み込まれた島々に変化して南海に集められている。この変化は明らかにギリシャ語版プトレマイオス図の実物を目にする機会が、1154年から1192年の間にあったであろう事を意味している。そして形状のみならずプトレマイオス図ラテン語版の“anthropophagi”という食人情報が、イドリーシー B 図には“ja'kulūna bani ādam”と新たに記載されていた<sup>88)</sup>。ādam（白人）を食うという記述はカタラン・マップにも見えるが、元来マワと呼ばれた森の食人鬼伝説はマレー人の間に伝えられたものであった。そしてその原点は古代インド神話の森の中の食人鬼伝説に求められる<sup>89)</sup>。

イドリーシー B 図南東端に残されたワクワクの二島は、プトレマイオス図の Argentea Metropolis の位置を継承しているようでもあるが、恐らくアラビア人未踏のワクワクという表現であろうと想像する。また新たな現地情報を加えたいイドリーシー B 図には、奴隷供給地を示す sanḡi の名称やヒンドゥー教浸透の地を示す āsūra の他、『島夷志略』で三島と表記された三嶼らしい sām-dūn の名称が、扶南 fnūna や占城 ṣaf の東方の島々に付けられている。

これらの島々は位置的に見ても現在のビサヤ諸島<sup>90)</sup>、ルソン島に相当するようであり、その南方の食人風習を伝える島は、A 図で muḡa とある島と思われる。アラビア人がボルネオ島を指して mudja と称したという説に従えば<sup>91)</sup>、A 図のワクワク、シーラ諸島はビサヤ諸島からルソン島をさしたものであろうと推定され、バグ、バクやシーラの日常用

語、地名の分布が重なる地域、更に黄金産出地という三要素がここに一致する。アラビア史料に見える極東黄金諸島の衣服、金装飾の風俗は、ヒンドゥー文化の影響下の東南アジアで一般的であり、多くの中国文献がこれを伝えるので、別の機会にまとめて取り上げようと思う。

カタラン・マップは、ユダヤ人らの現地情報やプトレマイオス図に南海情報を求めたと見える。その根拠として、中国東方の裸で生魚を食べる原住民情報がカタラン・マップ中の記載と、プトレマイオス図の Ichtiophagi に認められる点、そしてトラポバーナ島の金銀情報と Argentea Metropolis の対比が挙げられる。また南海交易で活躍したチャム人から得たらしい、チャム神話に見えるキンナラ（半人半鳥）、マカラ（怪魚）に類する記述もそれを示す。ここで認められる情報偏向は、アラゴン王国などのキリスト教勢力がイスラム勢力を放逐しようとしていた十四世紀後半には重大な意味を含んでいる。即ちアラビア側は対キリスト教勢力危機管理の為に、イスラム勢力の命運を左右する極東香料・黄金情報を守るのに必死であったのである。

これまでに見たところでは、紀元前後から既に東西史料に認められた極東黄金諸島情報は、環南シナ海交易に従事したベトナム、チャンパ側のチャム人、或いはカンボジア、シャム側のモン・クメール人といった、いわゆる蛮夷賈船が媒体となって伝えられたものである。そしてその活動海域にはワクワク、シーラという名称が既に大陸から伝播して黄金諸島の通称となっていた。南シナ海以東には wa 音、va 音で始まるワク音地名もいくつか認められるが、シーラ地名との隣接、金銀分布と重なるフィリピン諸島、ボルネオ島ではほぼ全てが ba 音である。地名の語原に関しては、インド・アーリアン系言語にはヴァーカー vācā として言語伝達を意味する語もあるので<sup>92)</sup>、厳密にはバク音の地名の語原が神

格としての驚を意味するか、言語伝達を意味するかの区別は難しい。だがいずれにせよ鳥の形をとることもある神格・精霊の言葉を伝える、シャーマンとしての首長を意味するバク（複数でバクバク）という語は、集落そのものをも指して使われた通称であったのではないだろうか。フィリピンでは古来の舟を指すバランガイという語を集落の意味でも使うが、バランガとは台湾南端の高砂族パイワン集落では翼を意味する点を考慮する必要がある。古代からマレー系人種の媒介によって伝播したバク (vac) という発音は、フィリピン諸島の例のように va 音も wa 音も欠く言語の場合は ba 音で、その他の場合はバク、パク、ファクなどと表記された事が判った。そしてそれは中国文献では薄、濮と表記されていたらしいが、後から極東南海に進出したアラビア人らの言語の場合は、va 音文字を欠いたが wa 音文字 (waaw) を有していた。そこで、バク音をアラビア語でワクと表記して記録した地名のうち、特に複数形のワクワクが黄金情報と倭国とを結んで注目されたのであろう。

本題の地域とは離れるが西域やアフリカにある baka, bagh という発音の地名にも、神格と関連する可能性が考えられる例がある。これらについては、アラビア語とは別の古代ペルシア語 bagh (神格、偶像) の影響などを含めて検討する事を将来の課題として残しておく。

当然のことながら、ワクワク=倭国説の背景にあるジバング=日本説の検証もこの際必要となろう。それも含めてベニス作成 (1459年) のフラ・マウロ世界図以降の極東黄金島情報や地図の変遷について、また十六世紀にマゼランが発見してスペイン地理書に記されたワクワク、シーラ島などの具体的な黄金諸島記事については、別稿で詳細に検討することとしたい。

(國學院大学大学院)

〔注〕

- 1) 桑原隲蔵「コルジェ氏の新書『マルコ・ポーロ』を読む」(『桑原隲蔵全集第三巻』岩波書店, 1968, 初出1921)。同「東西交通史上より観たる日本の開発」(『桑原隲蔵全集第一巻』岩波書店, 1968, 初出1929)。同「蒲寿庚の事蹟」(『桑原隲蔵全集第五巻』岩波書店, 1968, 初出1935)。
- 2) Gabriel Ferrand, 'Le Wakwak est-il le Japon?', Journal Asiatique Auvril-Juin, Paris, 1932, pp.193-243.
- 3) M.J.De Goeje, Le Japon connu des Arabes, Exusus F. du Livre des Merveilleuse l'Inde, Leyde, 1883-86, pp.295-307.
- 4) 前掲1)
- 5) 『國史大辞典第七巻』「ジバング」の項(榎一雄執筆, 吉川弘文館, 1993) p.57。宮崎正勝『鄭和の南海大遠征』中公新書, 1997, p.3。杉田英明『日本人の中東発見』中東イスラム世界2, 東京大学出版会, 1995, pp.34-48。牟田口義郎, 「『海のシルクロード』成立の背景」(『海のシルクロードを求めて』シンポジウム・シルクロード, 三菱広報委員会), 1989, p.65。東野治之『遣唐使と正倉院』岩波書店, 1992, pp.107-110。同「遣唐使は何を運んだか」(『遣唐使船—東アジアのなかで』朝日百科日本の歴史別冊歴史を読みなおす4, 朝日新聞社), 1994, p.42。護雅夫・別枝達夫『大世界史9・絹の道と香料の島』文芸春秋社, 1968, p.26。愛宕松男『愛宕松男東洋史学論集』第五巻(東西交渉史)三一書房, 1989, p.395。その他多数が管見に入っているが、省略させていただきたい。
- 6) Henry Yule & Henri Cordier, The Book of Ser Marco Polo, London, 1975, Vol. II, p.256, note.2. なお, シーラ=日本説は1718年にE・ルノードが提唱したものとされている。
- 7) 中川清次郎『西力東漸史』春陽堂, 1898, p.162。
- 8) 内田銀蔵「シラの島及びゴースに就きて」芸文6-3~7-4。
- 9) 前掲2)
- 10) "First Encyclopaedia of Islam"のワクワクの項(フェラン自身の執筆)による。E.J. Brill, First Encyclopaedia of Islam 1913-1936, Leiden, 1987, Vol. VIII, pp.1105-1109.



- 11) 『國史大辞典第四卷』「金銀島探検」の項(小葉田淳執筆, 吉川弘文館, 1984), p.522。
- 12) 藤本勝次訳注『シナ・インド物語』関西大学東西学術研究所, 1976。藤本勝次・福原信義訳注『インドの不思議』関西大学東西学術研究所, 1978
- 13) 前掲10)
- 14) Henry Yule 著, 鈴木俊訳, 『東西交渉史』帝国書院, 1975 (1944年の復刻版), 第七章 p.238-p.282。
- 15) 前掲12)『インドの不思議』注(12) (p.143) 参照
- 16) 前掲12)『シナ・インド物語』注(93) (p.105) 参照
- 17) 本名は, アブー・アブド・アル・ラーフ・ムハマッド・イブン・ムハマッド・イブン・アブド・アル・ラーフ・イブン・イドリース (1099/1100-1166年) であるが, アル・シャリーフ・アル・イドリーシー (イドリースの気高い子孫) と呼ばれ, これを略してアル・イドリーシーとなった。
- 18) <1154年地図> Konrad Miller, ASIA IN MAPS from ancient time to the mid-19th Century, Stuttgart, 1928. <1192年地図> Konrad Miller, 'Die Kleine Idrisi-karte von jahr 1192n.Chr.' Mappae arabicae I.Band3. Heft, Stuttgart, 1926
- 19) 太陽角度によって北半球を分割するプトレマイオス以後のクリマ区分は北限北緯63度だったが, イドリーシー地図は北緯64度を北限とした。S. Maqbul Ahmad, 'Cartography of al-Saharif al-Idrisi', History of Cartography vol. 2-1, Chicago, 1992, p. 162.
- 20) イブン・ホルダードの書に見える記述(前掲14)『東西交渉史』p.261)。
- 21) Isma 'il R. al Fārūqī & Lois Lamyā'al Fārūqī, The cultural Atlas of Islam, New York, 1986, p. 172, map27 (The Earth According to Ibrahim ibn Mu ḥammad al Iṣṭakrī) .
- 22) 前嶋信次『黄巢の乱についてのアラビア語史料の価値』(『東西文化交流の諸相』誠文堂新光社, 1971, 初出1957) pp.213-218。
- 23) 歐陽修撰『新五代史』卷六八, 閩世家第八, 王審知の条, 魏煜孫「中菲交通開始年代商榷」(『中菲文化論集』二, 中華文化出版事業社, 台湾, 1960), pp.154-55。
- 24) 『泉州府志』卷二六, 文職官上宋諸司所載史料, 前掲23)。
- 25) Joseph Needham 著 (東畑精一, 荻内清監修)『中国の科学と文明 第六卷, 地の科学』, 思索社, 1991 (第239図に付した記載)。
- 26) 増田忠男「宋代の地図と民族運動」, 史林27-1, 1942, pp. 65-83。
- 27) João de Barros, Decada terceira da Asia, Lisboa, 1563, Livro Quinto, fol. 130.
- 28) 「杜薄國隋時聞在扶南東漲海中」(『通典』卷一八八邊防四, 所収)
- 29) 松田壽男「東西交渉史とスマトラ島」(『松田壽男著作集』第三卷, 1987, 初出1962) pp.194-199。
- 30) 山田憲太郎『東亞香料史研究』中央公論美術出版, 1976, p. 320。
- 31) 「火山國隋時聞焉去諸薄東五千里」また, 「又有加營國北諸薄國西山周三百里」。
- 32) 藤田豊八『葉調・斯調・私訶條につきて』史学雑誌38-7, 1927
- 33) 朱應『扶南異物志』, 康泰『扶南土俗』(『吳時外國傳』。斯調, 諸薄, 頓遜, 都崑, 自然火州, 馬五州等の地名を伝える。『梁書』(卷五四, 諸夷列傳海南傳)以後, 多くの書に引用され続ける。石田幹之助『南海に関する支那史料』生活社, 1945, pp. 45-55。
- 34) 『新元史』卷二五三, 列傳中に, 琉球(台湾)の条に続いて南シナ海周辺の風俗記述があり, 「假馬裏打俗澆薄男女…」, 「文老古俗薄男女…」, 「須文答刺地澆穀少男女繫布縵俗薄其酋…」などと記す。
- 35) 『漢書』卷五一賈鄒枚路傳, 鄒陽の条に「竊自薄陋不敢道也」。
- 36) 『通典』卷一八七邊防三南蠻上の尾濮, 木面濮, 文面濮, 折腰濮, 赤口濮, 黑鬣濮。
- 37) 『梁書』卷五西南蠻傳扶南の条。
- 38) 『通典』卷一八八邊防四火山の条。
- 39) 『太平御覽』卷三五九。また, 珠厓郡は『漢書』に「元帝時遂罷棄之」とある。
- 40) アバカに関しては, 古川義三『グバオ開拓記』古川拓殖株式会社, 1956, 「第八章マニラ麻, ラミー及び古々椰子」を参照。別の火浣布については, 愛宕松男「マルコ・ポーロ所傳の火浣布(Salamander)に就いて」東方學28, 1953, 参照。
- 41) Jacobo de Ancona 「ベニスから泉州迄の海

- 路往復記」スペイン紙 (1997, 9, 22)。
- 42) Benjamin de Tudela (translated by Marcus N. Adler 1907), The itinerary of Benjamin of Tudela, Frankfurt am Main, 1995, 本稿の引用は同書 pp. 63-67。
- 43) 前掲12)『インドの不思議』第六話から第十一話迄など。
- 44) 澤田謙『宝庫ミンダナオ』六興商会出版部, 1943, pp. 16-17。マルコ・ポーロ (青木富太郎訳)『東方見聞録』現代教養文庫, 社会思想社, 1967, pp. 203-04のマグダスカルの項にもルク鳥談がある。
- 45) Antonio Pigafetta, Primer Viaje alrededor del mundo, Historia 16-No. 12, Madrid, 1985, p. 153。
- 46) 1545年6月にボルネオ島を南へ向けて出航したポルトガル人ペロ・フィダルゴが, 南西モンスーンで北方に煽られてルソン島に漂着したポルトガル史料 (アントニオ・ガルヴァン『新旧発見記』1563年初版, A.Galvão, Tratado dos descobrimentos antigos, e modernos, Lisboa, Estudio Bio-Bibliográfico, 1731, p. 280) の例がある。
- 47) 『太平御覧』巻六〇地部二五「謝承後漢書日汝南陳茂嘗為交趾別駕舊刺史行部不渡漲海刺史周敏涉海遇海欲覆没」などの他, 詳しい南海海難史料に関しては, 浦野起央『南海諸島国際紛争史』刀水書房, 1997, pp. 68-91を参照。
- 48) 暗黒から転じた光の宇宙創造観で, 神格と太陽を対応させた「ウパニシャッド」以来の考え方。
- 49) マドリード国立図書館所蔵の筆写本3015番。Descripción de la India Oriental Gobierno de ella y Sucesos acaecidos en el año 1639, fol. 102v。
- 50) 紀元前500年頃の金, 銅製腕輪, ペンダント, イヤリングや, 紀元前1~2世紀の色クリスタルビーズ玉や腕輪, 純金イヤリングがルソン島南部中心に出土している。現物写真は, H. Otley Beyer and Jaime C. De Veyra, Philippine Saga, Manila, 1947, pp. 34-35. 参照。西域, インドの影響が認められる。
- 51) 原住民言語に関しては, Lawrence A. Reid, Philippine Minor Languages: Word Lists & Phonologies, Hawaii, 1971, p. 74. 参照。また, 1600年のスペイン人イエズス会神父フ
- ィリピン諸島報告には, シロンガンについて記述あり。Pedro Chirino, S.J., Relación de las Islas Filipinas, Manila, 1969, p. 115。
- 52) R.L. Turner, A comparative dictionary of the Indo-Aryan Languages, London, 1966, p. 721 No. 12458。
- 53) Vaman Shivram Apte, The practical Sanskrit-English Dictionary, Delhi-India, pp. 1073, 1079
- 54) Robert C. Childers, A dictionary of the Pali language, London, 1875, pp. 474, 476
- 55) H.L. Shorto, A dictionary of the Mon Inscriptions from the sixth to the sixteenth centuries, London, 1971, p. 378。  
紀元前三世紀にメナム河畔スコータイに部落を建設したモン・クメール族はバラモン教を信奉。マレー系のチャム人, モン・クメール人が, 初期環南シナ海交易の主役とされている。
- 56) Juan R. Francisco, The Migration Theory Vis-a-Vis the Coming of Indian Influences in the Philippines, Mindanao Journal, XIV, 1-4 (July 1987 - June 1988) p. 31。
- 57) Martín Fernandez de Navarrete, Colección de los viajes y descubrimientos que hicieron por mar los españoles desde fines del siglo XV, Buenos Aires, 1946, V-p. 434。
- 58) 前掲45) A. Pigafetta: Ibid. p. 128。
- 59) 松岡静雄訳『瓜哇史』岩波書店, 1924, 巻末中世のジャワ地名地図。
- 60) 三上次男『陶磁貿易史研究』(上) 中央公論美術出版, 1987, pp. 277-358。青柳洋治「交易の時代 (9~11世紀) - フィリピン貿易陶磁に基づく編年の枠組」上智アジア学10, 1992, pp. 144-176。
- 61) 『宋史』卷四八九列傳第二四八外国五には, 「又有摩逸國太平興國七年載寶貨至廣州海岸」とある他, 閩婆國の条に淳化3 (992) 年12月蒲葦利の来朝がみえる。
- 62) 『タイムス世界地図帳』に見るワク音 (バク, バグを含む) 南海島嶼部に地名は, フィリピンに12, ボルネオに8, セレベスに2, パプアニューギニアに7, オーストラリアに4, ニューゼーランドに6, 以下各々1ヶ所, ソロモン, トンガ, フィジー, マルケサス。その他ファク,

- パクなどは、サモア、ハワイ、トンガ、ニュージーランドに見える。
- 63) 棚瀬襄『比律賓の民族』東亜研究所, 1941, pp. 88-89.
- 64) D.S.Rabor, Guide to Philippine Flora & Fauna, vol. XI, Manila, 1986, pp. 8, 9, 29-33.
- 65) 高砂族の語に関しては台北帝国大学言語研究室『原語による台湾高砂族伝説集』刀江書院, 1967, 付録 p. 19. また反復用法に関しては同書の pp. 724-727. オセアニア言語については、岡村徹「オセアニア諸語と重複」, 大阪女学院短期大学紀要23, 1992, pp. 109-113, の名詞の重複を参照。タガログ語に関しては, Fe Z. Aldave-Yap, The Phoenix Pilipino-English English-Pilipino Dictionay, Quezon City, 1961, p. 9.
- 66) 15世紀のニコロ・ディ・コンチの記事は micer Pogio 'Tratado de Pogio florentino', Libro de las maravillas de Marco Polo, Barcelona, 1982, pp. 246-47. 後代のイエズス会士フラ・カッペジオの記事は James Cowan, A mapmaker's dream, London, 1996, pp. 114-119.
- 67) 中国から見た異界の国々の記事を集めた海外南経にこれらの国の記事がある。
- 68) 徐朝龍『三星堆—中国文明の謎—史実としての山海経』大修館書店, 1998, pp. 160-63, pp. 209-210.
- 69) 国分直一『東アジア地中海の道』考古民族叢書, 慶友社, 1995, pp. 26-41.
- 70) 太平洋諸島の風俗, 船の名称などは, Islands of the Pacific, National Geog. Society, Cartographic Div. Washington, 1974.
- 71) 前掲65)『原語による台湾高砂族伝説集』付録 p. 33.
- 72) 斎藤昭俊『インドの民族宗教』吉川弘文館, 1984, pp. 16-19.
- 73) 前掲52) R.L. Turner, p. 514, (9115).
- 74) 前掲53) V.S. Apte, p. 936 (Vagisvara). 荻原雲来『梵和大辞典』講談社, 1978, p. 906.
- 75) 前掲54) R.C. Childers, p. 78.
- 76) 前掲72) pp. 94-96, 菅沼滉『インド神話伝説辞典』東京堂出版, 1990 (1985年初版), 「ガルダ」の項 (p. 28), 「ヴィシュヌ」の項 (pp. 79-80).
- 77) 前掲69), p. 38.
- 78) 中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』岩波新書, 1966, pp. 22-42, 第三表 (p. 34).
- 79) 前掲10) vol. III, p. 38. に FAGHFUR とあるが, マルコ・ポーロの百点以上ある写本, 版本では様々の表記例があろう。本稿例はコロンブスの所持した版本と, トレド本例。
- 80) 前掲27) de Barros, Livro Terceiro, fol. 65.
- 81) 石澤良昭『古代カンボジア史研究』国書刊行会, 1982, p. 315.
- 82) 前掲45) のピガフェッタ報告は, ビサヤ諸島中心の産金情報, 特にミンダナオ島北東部について, 家具調度に金を用い勞せず露出金を採ると伝える。ミンダナオの Baganga, Bacuag などは金産出地域の中心集落である。ビサヤ風俗の金歯装飾の他, 考古史料としてパラワン出土の黄金仮面や, パラワン出土の純金ガルダ像, ミンダナオ出土の21金の女神像が有名。また, 1990年にマニラ東方ラグナ州で発見されたフィリピン最古の銅板碑文 (10世紀半ば) は, 金924.6g の負債に関する裁定記録。その他『東西洋考』巻五呂宋の項, 巻十一折呂宋採金議の項参照。
- 83) 前掲50) H.O. Beyer / J.C. De Veyra, p. 32. 第92表に, スペイン占領時作成のフィリピン原住民言語とアラビア語, ヘブライ語の文字の対照表がある。同表によると, フィリピン文字の V 音に対するアラビア文字, また W 音表記の古代フィリピン文字がない。別の史料 (National historical Institute, Kasasay, Manila, 1970, p. 18) のフィリピン古代文字調査比較一覧表では, 12例中の6例で V 音が欠落。
- 84) この記述内容はマルコ・ポーロの黄金島情報と符号する。
- 85) 二種類の誤記か。
- 86) マルコ・ポーロの書の数字にバラつきがあることは知られている。筆者が調査した6点の写本, 版本でも全てが異なりひとつも7548の島数はなかった。渡辺宏「マルコ・ポーロ『世界史』と1375年カタラン世界図」(東西交渉1, 1982, pp. 37-53) の7例も各々が異なる。同論稿はカタラン地図の地名表を添付。
- 87) ヴァティカン教皇庁図書館蔵写本 Codex, Urb. lat. 277, 日本複製版は1984年, 岩波書店。
- 88) B 図横帯 I 縦帯 IX 区分の南東角に位置。

- 89) マワに関しては, Juan R. Francisco 'The Glint of Metal', Philippine Heritage, vol. 2, p. 299. インド神話の食人鬼については, 前掲76) 菅沼滉著書の「サクティ」の項の3 (p. 172), 「ヴァシシュタ」の項 (pp. 56-57)。  
90) ビサヤ海域の港ブトゥアン, セブからの奴

- 隷積み出しが知られている。  
91) Victor T. King, The Peoples of Borneo (Oxford, 1993, p. 18) に同説を紹介。ワクワク島がムジャー島と一緒にあるというイドリーシーの描写はフェランが紹介。前掲10) p. 1105.  
92) 前掲52) p. 669 (11472)。

Revisión de las Islas de oro de las Indias en los mapas antiguos,  
"uāḡuāḡ" y "sīla" en el Signo Magno

Setsuko MATOBA

Es común citar la empresa de Cristóbal Colon al referirse a las islas de oro de las Indias, y en concreto a la de Cipango. El nombre de Cipango, que se funde con el de Japón como un algo inseparable, no ha sido el único difundido entre los mercaderes y navegantes procedentes del Oeste en los siglos pasados. Los árabes nos recuerdan otros nombres tales como "uāḡuāḡ" y "sīla", de las cuales traían noticias de su abundancia en oro. No es nada extraño pues que, de la misma manera, los chinos también estuvieran enterados de la existencia de islas de tanta riqueza, y mucho antes que los árabes. Lo mismo debiera de haber pasado con los cartógrafos interesados en dar nacionalidad al dibujar de las noticias. Actualmente podemos localizar aquellos mapas realizados, no por simple interés científico sino por propósitos más ambiciosos, y gracias a ellos nos es fácil seguir el curso y la propagación de las noticias de las islas de oro de las Indias, que unas veces se llaman de una forma, y otras veces, de otra.

Concretamente, las islas a las que llamaban "uāḡuāḡ" y "sīla" los árabes, desde el siglo IX, son islas que están bajo influencia hindú. Desde los principios de nuestra era los chinos ya habían dejado testimonios escritos de sus noticias. Su descripción de las islas comporta estas características de influencia hindú, y también, dada su localización austral, nos intiman se tratan de islas malayas. A pesar de ello, las denominaciones árabes de "uāḡuāḡ" y "sīla" dieron origen a la actual confusión (Japón y Corea). Como podemos ver, son islas que tienen las características de las islas del Signo Magno y no del mar de Catai donde se sitúan Japón y Corea. No hay por lo tanto razón de dar oficialidad a estos nombres que son simples apelaciones locales utilizados por los aborígenes. Con este argumento he enfocado el tema en las noticias de las islas de oro de las Indias en los mapas antiguos tanto chinos, árabes, o europeos de los siglos XII a XIII.